



上武 やす子  
Yasuko  
Uetake

<略歴>

- 1934 室蘭市に生まれる
- 1985 北海道ウタリ協会登別支部（現：登別アイヌ協会）生活相談員
- 1991 同協会 副支部長
- 1991 知里真志保を語る会 会長
- 1996 北海道ウタリ協会登別支部（同上）支部長（2006年まで）
- 2000 北海道ウタリ協会（現：北海道アイヌ協会）理事（2012年まで）
- 2001 同協会 副理事長（2003年まで）

<受賞歴>

- ・第27回北海道アイヌ芸品コンクール 優秀賞受賞（1994）
- ・財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（現：公益財団法人アイヌ民族文化財団）アイヌ文化奨励賞受賞（1997）
- ・伝統文化ポーク賞 地域賞 受賞（2009）
- ・北海道文化財保護功労賞 受賞（2009）
- ・登別市教育文化貢献表彰（2010）
- ・アイヌ民族文化財団 アイヌ文化賞受賞（2018）
- ・文化庁長官表彰（2019）

“やり出したらご飯食べるのも忘れてしまう。”

“（設計図は）頭の中にあります。設計図って  
いうか、大体でもでたらめにやってるわけ  
ではない。バランスは考えています。”

“結局、先生っていなかったもんだから、どう  
したら綺麗に仕上がるかっていうこと考えて。  
自分流です。”

“（着物にオリジナルの文様の「かもめ」を入  
れることについて）やっぱり噴火湾の漁師町  
だからね、それにちなんだ何か特色入れたい  
なと思って。そうしたら、かもめさんが浮か  
んできたの。”

“（Q上武さんの教え子は何人くらいいますか？）  
追分、幕別、それから函館、有珠、室蘭。登  
別ではピリカノカの教室が一番古かったか  
ら。まあ100人までいなくても、60人以上  
はいるね。”

“（Q見るのと実際に複製するのでは違いますか？）  
そう。裏を見ると、おーこういうやり方して  
んのかとか、この糸の始末とか、布の始末ね。  
昔の人は頭いいなと思って、本当つくづく感  
じた。”

“昔の人は糸もないのにすごい芸術的な文様  
を、よく作ったもんだと思う。”

“（端切れが）小さいから捨てないんです。  
どこかに使うときが来るから。だから昔の人  
は端切れが簡単に手に入らないから、本当に  
大事にして使ってたなあっていうのが、古典  
のものをみると分かりますね。”

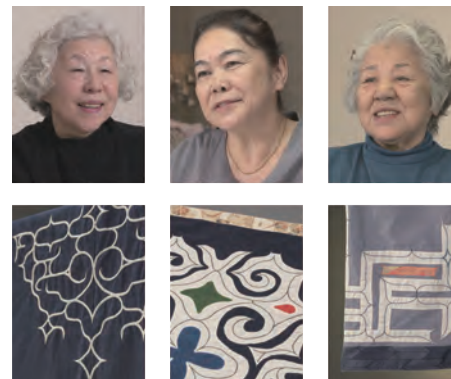
“博物館に行って、古い着物を見ると、すご  
い感性だなと思って、感心して、勉強させて  
もらった。面白かった。（昔の着物を）複製  
するたびに、同じ袖の縫い方でも、どうして  
こうなってんだらうとか、1枚1枚違う。だ  
から1つ1つがすごい新しい発見でね、楽  
しみながら、苦しみながら、勉強させてもら  
ったっていうかね、私の本当に一番の財産だ  
った。”

“まず伝統ありきだから、複製はすごいため  
になった。私は複製で勉強させてもらったの  
本当に。複製が先生だった。”

“根っこは伝統なのよ。オリジナルは自分用。  
教える時はやっぱり自己流は教えない。”

# わざ 技

Hands and Hearts  
vol.4





高野 啓子  
Keiko  
Takano

#### <略歴>

1953 東京都に生まれる  
1972 結婚と同時に二風谷に移住、貝沢民芸に就職  
1980 夫の繁廣氏とともに高野民芸を二風谷に創業、現在に至る

公益財団法人アイヌ民族文化財団認定の伝統工芸家。  
アイヌ女性の手仕事の素晴らしさに魅せられ、  
アトウシ、チカラカラペ、カバラミブ、マトンブシ、テクンペ、ホシ、  
エムシアツ、タラ、サラニブ、チタラベ等を制作している。  
アイヌ女性の手仕事のなかでも一番難しいといわれているエムシアツは、  
木の皮を剥ぎ、糸を作ることから始めて編み上げて制作するなど、  
伝統的な技法、制作方法を重視している。

#### <受賞歴>

- ・社団法人北海道ウタリ協会（現：公益社団法人北海道アイヌ協会）主催  
北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞（1993）
- ・財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（現：公益財団法人アイヌ民族文化財団）主催  
アイヌ工芸作品コンテスト 優秀賞及び佳作（1998）、佳作及び入賞（1999）

“（Q 着物作りのきっかけは？）子どもが小学校1年生になったとき、萱野茂さんのアイヌ語教室に、子どもに誘われて行きだしたの。そして、踊りをやるようになって、その着物を作るのに萱野れい子さんに着物を習ったところが始まりかな。”

“自分で着物を縫うようになって、その時は、大変だって思いしかなかったかな、作るのに。そのあと独立してお店を持ったとき、お客さんが博物館を見て、博物館のものと同じものが欲しい、作ってくれっていうようになって、それから博物館や、古いものや、図録や、色々見て勉強して、それで本当に古い伝統的なものを作るようになって。それからかな。面白味出てきたの。”

“（アイヌ文様の刺しゅうの魅力は）文様の良さかな、一番は。昔の人の思いがこもってるのを感じますね。”

“（Q この布にこの糸は使わないだとか、高野さんなりのルールはありますか？）あんまりないわね、ルールっていうのは。ただ自分の感覚で、文様に合う糸の太さや色は考えるけど。全体ができた時の雰囲気かな。”

“（Q 使う布や糸をお客さんに確認するんですか？）しません。全部自分で決めます。ただ（着物の）技法（チカラカラペ、チヂリ、ルウンペなど）だけは聞きますね。そういうのは聞くけど、文様と糸の色は全部自分でやっちゃうわね。”

“（お客さんが）自分で思ってるのよりも良いものを作らないと、お客さん納得しないから、それは心がけますね。だから一番使うのは時間ね。時間をかけて、かけて、かけて、かけて。それでお客さんに渡す感じになるかな。”

“（若い人たちが高野さんの作品をお手本にしたときに）私を見てくれて、本当に嬉しいんですよ。そして、これ以上に良いものにしてほしいの。あ、ここは自分なりに直そうとか、あ、ここはこうやったらいいんじゃないかなと思ってくれるのが一番嬉しいですね。”



間宮 喜代子  
Kiyoko  
Mamiya

#### <略歴>

1950 白糠町に生まれる  
石狩市在住。公益社団法人北海道アイヌ協会認定の優秀工芸師。  
伝統的な着物などの資料を参考に、自分独自の文様、構成を考え、  
制作に取り組んでいる。

#### <受賞歴>

- ・社団法人北海道ウタリ協会（現：公益社団法人北海道アイヌ協会）主催  
北海道アイヌ伝統工芸展 最優秀賞（1998,2002）ウタリ協会理事長賞（1993）
- ・財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（現：公益財団法人アイヌ民族文化財団）主催  
アイヌ工芸作品コンテスト 入賞（1998）、奨励賞（2001,2004,2008）

“（Q 自宅で普段作業するときはどういう風に？）やる時は黙々と。3時間から4時間くらいやってます。大体夜の6時くらいから12時くらいまでやってるかな。夜にかけてやると静かで、まわりの音を気にしないでいいもんだから。若い時は気がついたら朝までやってる時があった。2日くらい寝なくてもできたんだけど。”

“（初めてアイヌ刺しゅう講座を受けたとき、先生に）下手くそって言われたのが一番の思い出かな。やっぱりやったことなかったの、すごい下手くそだったんですよ。それもあったから今まで来たんじゃないかなって思う。”

“（Q アイヌの刺しゅうについて昔の人はすごいと感じますか？）すごいと思います。何にもない中、手だけで測って作ったって聞いてます。うちは色んなものがありますけど。昔の人は糸もなかったから木の繊維をとって糸にしたり。針もなくて、針金みたいなをつぶして針にしたりっていうのは聞いたことがあります。”

“文様もずれてるっていうのが、それがまた良いんじゃないかなって私は思っています。ピタッと合うのもいいけど、合わなくてもいいんじゃないかなって。”

“うまくいけば綺麗にできる時もあるし、ダメなときはいくらやってもダメだし。そういう時はしないです。1時間くらい置いて、それからまたやるっていう時もあります。”

“（Q 刺しゅう以外の工芸品は作らないのですか？）作らないです。これ（刺しゅう）だけです。他のをやると、刺しゅうの方ができなくなるので、それはそういうのをできる人にやってもらった方が良くないかなと思って。自分ではこの刺しゅうだけで。”

“このままだと思います。自分のできる範囲だけでやろうと思う。無理しないでやった方が良くと思う。このままの調子で。”